

〔実践報告〕

甲南大学夏期日本語集中講座における 日本語体験学習の実際

富 阪 容 子

1. はじめに

甲南大学国際言語文化センターでは1997年から夏期日本語集中講座が実施されているが、その中に日本語体験学習プログラム¹⁾が取り入れられてきた。計120時間の学習時間のうちの約10%が体験学習²⁾(事前、事後の活動も含めて)にあてられている。対象となる学習者は学習歴約150時間で³⁾初級後期から中級前期にかけての段階にある。夏期日本語集中講座の期間中に大学2年生レベルの日本語を学習すれば、自国での1年分に相当する外国語科目の単位が取得できることになっている。そのために予想以上に厳しい集中コースとなる。このコースはこれまでに次のように計4回にわたって実施されてきている。

第1回	1997年6月～7月	5週間	学生数	19名	
第2回	1998年6月～7月	5週間	学生数	25名	
第3回	1999年6月～7月	5週間+2日	学生数	12名	
第4回	2000年6月～7月	6週間	学生数	29名	総数85名 ⁴⁾

本稿は過去4年間に行なわれた体験学習のコースデザイン、活動の実態及び学生に対するアンケート調査の結果を報告すると共に、今後の可能性を探ることを目的とする。対象とする学習者の日本語能力レベルと体験学習の実際がよくわかるように、初めに2000年夏に実施された「クラブ取材」を取り上げることにする。その後で、他の活動例を紹介し、これらの活動をいかに位置づけるべきか、どう評価すべきかを考えたい。

2. 体験学習の一例「クラブ取材」

「クラブ取材」の場合、学習者に与えられるタスクの概要は次の通りである。これらの活動内容を学習者に伝えるためのオリエンテーションが学習活動の第一歩となる。教師と学習者間のインフォメーションギャップを埋めるために日本語で行なわれる質疑応答は最も自然な形のコミュニケーション活動である。この部分がうまく機能すれば活動全体が順調に進むことになるだろう。当日に行なわれるタスクは次のようになっている。

① 部室を訪問する (約50分)

- ・ 部室を訪問して、自己紹介をする。
- ・ クラブ活動の実態や部員の生活について質問する。

- ・ クラブ活動の一部を体験させてもらう。
- ・ 写真をとってもよいか許可を得る。
- ・ 感謝のあいさつをして退出する。

② ・ 電話実習（約10分） 研究室に電話をかけて教師に事後報告を行う。

今年は3人ずつのグループに分かれて、「茶道」「書道」「能楽」「映画」「放送」のクラブのうちの一つを訪問することにした。次に示すのは、放送部を訪問した際に放送ブースの中で行なわれたやりとりの録音記録⁵⁾である。Aは日本人のクラブ員で、BとCは留学生である。本来は留学生がクラブ員に質問したり取材したりすることになっていたが、このブースの中では留学生の側が日本人学生から質問を受けるという形になっている。

1) A : 今日は留学生のみなさんに来ていただいているんですけど……。それじゃ、自己紹介の方からまず聞きたいと思います。それじゃ、こちらの方から自己紹介をお願いします。

B : ……

A : 名前を

B : ……

A : え～ お名前を。

B : トーマス。(ここでは仮名を示す)

A : は?

B : トーマスです。

A : トーマスさん? トーマスさんは今おいくつですか。

B : にじゅういちです。

A : 21才。ということは僕と同じ年ですね。

B : ……

A : おないどし……。どういうんでしょうかね? (英語を使うが通じない)

B : ……

A : ハハハハ

B : ハハハハ

2) A : それじゃ、こちらの方?

C : はじめまして。あいはらジョニーです。

A : あいはらさんということは、一応日系の方ですか。

C : ……よんせい。

A : 四世? ああ、そうなんですか。やっぱりあいはらさんというのは日本の名字ですよ。

C : はい、はい。(ちょっとためらいながら)

A : やっぱり、あれですよ。むこうだと名字じゃなくて、名前で呼ぶのが普通ですよ。

C : …… (あいづちなし)

A : (一人で会話をどんどん続けるが、相手の応答なし)

ごめんなさい。だんだん通じないような気がしてきた。僕が不安になる。

[中 略]

A : やっぱり、あのテレビとか見られますか。日本のテレビとかラジオとか。

C : ハワイで? 日本で?

A : 日本。

C : 日本であまり…見ない。あまり。でも少しアメリカの映画。

A : え、何? 最近見た映画は?

C : Three men and a little lady. 男の人と女の人, コメディ。……

(説明が続けられなくて) あ〜。ごめんなさい。

A : いえいえ、ぜんぜんかまいませんよ。

クラブ取材の体験学習は来日して既に3週間目の活動であるにもかかわらず、留学生の日本語運用能力はまだまだ低いものであると言わざるを得ない。ここに紹介した2人の留学生はごく平均的な学習者であるが、彼らはただ単語のみを使った応答しかできない。受動形や使役形などの難しい動詞の活用を学習中でありながら、彼らはコミュニケーション上の要請から必要とされている「ます/ました」「ています/てください」などの最も平易な文型の運用さえ困難である。それらがうまく使いこなせないために、自己紹介がうまくできなかったり、映画の内容を説明することができなかつたりという挫折を味わうことになる。しかし、この挫折は意味のある挫折であると言える。というのは、現実のコミュニケーションに非常に似かよった場面であるからである。日本人学生と留学生との接触場面におけるコミュニケーションの難しさが痛感されるが、同時に両者の歩み寄りの過程も観察される。日本語の教室活動では教師はもっと語彙や文型をコントロールしているであろうから学生はこのような挫折を味わうことなく済んでしまうかもしれない。

「クラブ取材」という活動は留学生のための日本語授業の一環であることを事前に日本人学生に伝えておいたので、比較的フォーマルな状況で会話が進められたことと思う。しかし、このレベルの学習者にとってフォーマルな状況下で約50分ほど日本語で会話を続けることは極めて難しいことである。上の録音からもわかるようにさまざまなミスコミュニケーションの場面が生じている。その原因は留学生の日本語能力の不足にあることは確かであるが、同時に日本人学生の側にも異文化間コミュニケーション上の問題点があることも事実である。それは他のクラブを訪問した留学生たちのコメントにも表れている。たとえば、映画クラブでは日本人のクラブ員は自分たちが映画作りのためにどんな活動をしているかということ留学生に伝える努力を果してどの程度まで試みたであろうか。映画の内容を日本語で説明することが留学生にとって難しいのと同様に、日本人学生にとっても自分たちのクラブ活動の様子や映画作りに対する情熱などを留学生に伝えることは容易なものではなからう。このクラブ取材という体験学習はさまざまな条件に左右されるので、結果の善し悪しについ

て予想することは難しい。避けられない出来事や誤解が生じる可能性も大きい。しかしながら、同世代の学生と会うという体験は何ものにも代えがたい側面を持っている。茶道部の取材に行った学生は次のようにコメントしている。

I thought today's activity was a lot of fun. Even though my legs and feet hurt a little bit, it was still a lot of fun. We got to see a traditional tea ceremony performed and I thought it was quite interesting. Also the people were very kind and we made some friends. 同じ大学で学ぶ仲間同士の出会いは言葉の壁をいかに越えるかの答えを模索するのに役立つだろう。留学生のみならず日本人学生の側にも大きな影響を与えるのではないだろうか。

3. 体験学習の全体像

次に、これまでに実施された体験学習の全体像について概観することにしよう。各体験学習には次のようなステップが考えられる。

3-1 体験学習の各ステップ

A：事前	教室内	・ 活動の目的と手順を知る ・ 事前の手当て（必要となる語彙や表現を学ぶ）	30～50分
B：本番	教室外	a. 話す&聞く b. 見る（読む）&情報とり c. タスクシートに書き込む	100分
C：事後	教室内	報告する，感想を述べる，議論する 必要に応じて発展的な活動へと進める	30～50分

体験学習とは教室外活動Bを中心とする学習活動全体（ABC）を指すものである。C段階は省略されることもあるが、A段階は不可欠なステップである。

3-2 体験学習の実例

前節では「クラブ取材」について述べたので、ここではそれ以外の活動例①～⑥を紹介してそれぞれの詳細を3-3以下で解説する。それぞれの活動は週一回のペースで実施された。

	活動内容	行き先	行動形態	必要な物品	実施年度
①	南京町オリエンテーリング	繁華街	2人ずつ	交通費	1999～2000年
②	商店訪問と地図作り	商店街	2人ずつ	カメラ・テレホンカード	2000年
③	タクシー乗車と酒蔵見学	資料館	3～4人	タクシー代	1997～2000年
④	児童館訪問	児童館	7～8人	交通費・おみやげ	1997～2000年
⑤	キャンパスインタビュー	学内	2人ずつ	なし	1997～1999年
⑥	留学生のパーティー	学内	全体活動	飲み物など	1999年

3-3 タスクの概略

上に述べた体験学習において課されるタスク内容について次に紹介することにしよう。

- ① 切符を買う ⇨ 電車に乗る ⇨ 指定された出口から出る ⇨ インフォメーションセンターを探す ⇨ 英語のパンフレットや地図をもらう ⇨ 指定の場所で教師からスタンプをもらう ⇨ 南京町の近くのマクドナルドで集まる ⇨ (現地解散)
- ② 決められた店を訪ねる ⇨ インタビューする ⇨ 商店街を調査し地図を作成する ⇨ 担当教師の部屋に電話して経過報告をする
- ③ タクシーを拾う ⇨ 行き先を告げる ⇨ 運転手と雑談をする ⇨ 値段をきいて支払う ⇨ 領収書とおつりをもらう ⇨ 資料館を見学する ⇨ (帰りも同様にタクシーに乗って戻る)
- ④ バス (電車) に乗る ⇨ 小銭を支払う ⇨ 児童館を訪ねて挨拶をする ⇨ 子供たちに自己紹介をする ⇨ 自国について紹介する ⇨ 英語の歌や遊びを教える ⇨ 日本の伝承遊びを習う ⇨ 自由に話し合う ⇨ お礼の言葉を述べる ⇨ それぞれの子供にお礼の菓子を手渡す
- ⑤ 大学生に声をかける ⇨ 質問する ⇨ パーティーに誘う ⇨ 連絡方法をたずねる
- ⑥ 事前に招待した人に電話をかけて出席を確認する ⇨ パーティーの準備をする (音楽/ダンス/飾りつけ/飲み物など) ⇨ 客を迎える ⇨ 自己紹介と友人紹介 ⇨ 自分の大学紹介や特技の披露など ⇨ みんなでゲームやダンスなどをする ⇨ フリータイムの雑談 ⇨ 終わりの挨拶

3-4 事前の手当ての一例

3-3のようなタスクがスムーズにできるように事前に語彙、漢字、表現を習っておく。話すための表現だけでなく、読んで理解すべき漢字なども知っておくと役に立つ。単なるロールプレイではなく、次に現実のコミュニケーションの場面が待っているので学習者の態度は極めて意欲的で熱心である。教室で行なうのは「買い物ごっこ」に過ぎないが、体験学習では買い物そのものを行うことができる。事前練習にあまり時間をかけることができないのは残念であるが、学習効果は非常に高い。上記の①～⑥のタスクがスムーズに展開されるように、次のような事前のインプットが必要である。

- ① 電車や駅に関する語彙、漢字/道を聞く表現
- ② 自己紹介の表現/店の人に話しかける時の表現
- ③ タクシー乗車に関する言葉/方向を指示する表現/支払って領収証をもらう表現
- ④ 子供に対する話し方/英語の歌と日本語の歌/子供と遊ぶ時に使う言葉
- ⑤ 時間があるかどうかきく表現/誘う表現
- ⑥ 客を歓迎する表現/客をもてなす表現/飲み物をすすめる表現

多くの表現のバリエーションの中のどれを用いるかは学習者本人にまかせたい。また、予想外の出来事が生じた際に如何に対処するかが最もやりがいのあるタスクとなるだろう。

3-5 事後の活動

- ②の活動を例にとって説明しよう。指定された商店での対話をすませたら、指定された商

店街の店舗を調査したり、写真をとったりする。これらの一連の活動は二人ずつのグループで行なうために、事後にはお互いの情報を持ち寄って報告会をする。自分たちの観察したことを言語化して表現することは意味のある活動である。他のグループの行動についての情報を知ることにも興味をそそられる。取材中に撮影した写真によって視覚に訴えることも有効である。更にすべてのグループの情報を合わせて商店街の地図を作成するという作業をしたりその商店街の特徴や流通業界の現状などの議論へと発展させていくことができる。夏期日本語講座では学習者の日本語力との関係や時間の制限からそれらを割愛したが、自主的なプロジェクトへと進めることも可能だと思われる。

4. 体験学習の難易度と有効性チェック

体験学習の成否を決める要素にはさまざまなものがあり事前に予測不可能なものが多い。しかしながら、言語学習プログラムの一環であるという点からすると、次の5つの主要な要素を抽出することができる。それら各要素を5段階に評価して体験学習の難易度をチェックしてみたい。もろろんこの他にもいくつかの要素が加わり、ある活動が有効なものであったかどうかの最終的な判定が下されることになる。

主要な5要素	A. 言語使用の量	1	—	2	—	3	—	4	—	5 点
	B. 言語使用の質	1	—	2	—	3	—	4	—	5 点
	C. 相手との接触度	1	—	2	—	3	—	4	—	5 点
	D. 緊張度, 新鮮度	1	—	2	—	3	—	4	—	5 点
	E. 独創性の発揮	1	—	2	—	3	—	4	—	5 点

上記のAとBは言語使用の面に着目したものである。そのタスクを遂行するためにどんな言語が使用されるだろうか。必ずしも話す聞く面だけの言語使用とは限らない。時刻表を読んだり駅名を読んで理解するなどの活動も含んでいる。「A言語使用の量」とは多いかどうかを問うものであり、「B言語使用の質」とは難易度を問うものである。「C相手との接触度」というのは、接触相手とどの程度の間人間関係を結ぶかを問うものである。道をたずねる相手や、インフォメーションセンターの人との関係は行きずりの一回きりの関係に過ぎないが、同じ大学のクラブ部員や近隣の商店街の店員の場合は複数回の出会いの機会があるだろう。友達と呼べるような人間関係へと進展する可能性もある。「D緊張度, 新鮮度」とは、対人関係なら初対面の場合は緊張する度合いが高いだろうし、訪れる観光地なら初めてのところの方が新鮮度が高いと言えるだろう。「E独創性の発揮」は決まりきった手順や言語使用だけで十分か、又はその人独自の創意工夫やアドリブ的要素を要求されるかどうかを問うものである。以上のような5つの観点から、第3節にあげた体験学習を評価してみることにする。この表では「南京町」や「酒蔵見学」が初めての経験であったものと仮定して判定している。このような活動では実施のタイミングが大きく成果にかかわってくる。

活動名		A	B	C	D	E	総合点
①	南京町オリエンテーリング	3	2	2	5	2	14
②	商店訪問と地図作り	3	3	2	3	4	15
③	タクシー乗車と酒蔵見学	2	3	1	5	2	13
④	児童館訪問	4	4	5	5	4	22
⑤	キャンパスインタビュー	4	4	4	5	4	21
⑥	留学生のパーティー	5	5	5	5	5	25

この表での総合点が高いものは多くの可能性を含んだ活動であると言えるが、学習者の日本語運用能力との兼ね合いを考慮することが欠かせない。基本的には易しいものから難しいものへと進行するのがよいだろう。難易度の高いものは質的にはやりがいがある活動と言えるが、学習者が自分にとって役に立つと判断するのは活動そのもの以外の要素にも左右される。たとえば南京町では現地解散した後で買い物や食事を楽しめるといった要素を持っているので、プラスの要素として評価され、逆に児童館の場合は、往復にかかる時間が長くなって帰りが遅くなってしまふことがマイナス要素として機能することがある。その他にも、事前に想定していなかった展開がプラスやマイナスとして働くことがある。たとえば、南京町に到着するまでに道に迷ってしまったことや、タクシーで間違ったところへ連れていかれたことなどのハプニングである。しかし、これらの予想外の出来事はマイナス要素として働くより、むしろプラス要素になることの方が多いようである。神社でひいたおみくじが吉だったかどうかということさえ影響を与えかねない。上の表に示されているように、日本語体験学習を企画する側の教師が事前に注意を払うべきはA～Eの部分であるが、総合的な判定を下すのは学習者本人である。そこで、次章では学生からの感想や評価について触れることにする。主として1999年度と2000年度の体験学習に対する評価を取り上げる。

5. 学習者からのフィードバック

各体験学習を学習者がどう受け止めたかについてのフィードバックは次のように段階的に手に入れることができる。

1. 教師による観察
 - ① 事前
 - ② 活動中
 - ③ 事後
2. 学生からの報告
 - ① 電話報告
 - ② タスクシートで示される報告
直接、伝えられる感想
 - ③ 報告会（録音テープ／写真）
 - ④ Evaluationシート

タスクシートは各体験学習ごとに提出されるものであり、Evaluationシートはコース全

体の終了時に提出されるものである。それらを次に紹介しよう。

A：2000年学生からのコメントより

① 楽しいこと

- ・ Visiting Kobe sightseeing spots — interesting, fun. (神戸散歩)
- ・ Interviewing Konan clubs — have more understanding of what the students here are actually doing.

② 言語使用が不可欠

- ・ Speaking is always very important, especially when assigned to do so.
- ・ I thought it was a great exercise to practice asking for directions although it was a little difficult since people talked very fast. (南京町)

③ 人との接触を通しての言語使用

- ・ They were fun, but still forced us to use Japanese. (南京町と児童館)

④ 文化理解

- ・ You learn how Japanese use to make sake and a glimpse into their history and culture is seen. (酒蔵見学)
- ・ Making a map was good. It allows you to see around the area that you would not always know was there. (商店訪問と地図作り)
- ・ This was an interesting activity that used our Japanese well. It allowed us to explore parts of Japan that we would not otherwise have visited. (南京町)

B：1999年学生コメントより

この年のコメントは否定的なものを含んでいる。来日後一週間もたたぬうちにキャンパスインタビューという課題を与えたこと、更にその時にキャンパスで出会った人をパーティーに招待するというタスクを付け加えたことが大きな失敗につながった。インタビュー練習のためのインタビューではなく、現実的な意味ある活動にしたいという意図が裏目に出た。ホストファミリーとの生活、日本の大学での生活にまだ慣れていない時期だったために留学生の情緒不安定を助長する結果になってしまった。もう一つの問題は4週目に行なわれた留学生のパーティーだった。日本人学生を招待する楽しい企画にするための時間が十分持てなかったことが不評の原因だった。いつも歓待される側になるのではなく、人を招待するという積極的役割を果してもらいたいという願望が十分に実らなかった。ただし、1週目のキャンパスインタビューに拒否反応を示した者の中にも4週目のパーティーを高く評価する者が出たのは喜ぶべきことであった。企画そのものが悪かったわけではなく、改良の余地こそあれそれ次第では大きな効果をあげうるのではないかと思われた。学生のコメンを次に示す。

① 時期が早い

(キャンパスインタビュー)

It was too difficult to do it in the first week of school.

- ② 恥ずかしい, 不自然, 断られるのはいや。 (キャンパスインタビュー)

Too difficult, kept getting turned down, too hard to get phone numbers and addresses from strangers, very uncomfortable.

- ③ 準備が不十分だった (留学生のパーティー)

Preparation was too quick and shabby. Knowing what was to be done for entertainment before inviting or calling would have been better.

ここで明らかになったのは第4節のA~Eの基準による得点の高いものは学習者にとって負担が大きくなるということである。学習者の能力をはるかに超えたものは有効性が低くなる。学習者の日本語運用能力を正確に把握してわずかにその能力を上回るものを選択すべきであった。次に、1999年と2000年の学生が選んだ体験学習ベスト3を紹介する。

	1999年	2000年
ベスト1	酒蔵見学	児童館訪問
ベスト2	南京町	南京町/商店訪問
ベスト3	児童館訪問	酒蔵見学

上の表を見ると、この2年間の体験学習についての学生の受け止め方の違いがはっきりする。99年では「酒蔵見学」がベスト1に入っているのに対して、2000年ではベスト3を占めている。「酒蔵見学」(タクシー乗車を含む)という体験学習は毎年ほぼ同じような一定の効果をあげていると考えられる点からすると、2000年の場合は児童館の評価が特に高かったことが明らかになる。今年はこのプログラムが既に4回目にあたること、事前にリハーサルの時間がとれたこと、一人一人の学生の役割分担が明確になっていたこと等が成功につながったものと考えられよう。児童館訪問や商店街調査などの地域に根ざした活動は、当初は協力者を得るのに労力が費やされるが、やがては相互交流の場としての意義が生じてくることになる。学生からのフィードバックを的確に分析して、今後のコースデザインに反映させたいと思う。

5. 体験学習の可能性

それぞれの体験学習の成否について考慮してきたが、プログラムのシラバスを考える上では全体のバランスをとることが重要である。そのような観点からすると、以下のようなシリーズから組み合わせることも一つの案である。次の3つのシリーズを考えてみた。

A 日常生活シリーズ B 郷土探訪シリーズ C イベントシリーズ

これまでに実施してきたものの中では、Aは商店街の散策、買い物、写真撮影、電話実習などが考えられる。Bには博物館の見学、神社仏閣の訪問などがあり、Cにはクラブ取材や留学生のパーティー、児童館の訪問などがある。体験学習はこの他にもいろいろなものが考えられよう。自然な言語活動、よく出くわす機会のある活動を考えれば、役に立つ楽しい

活動と評価されることになる。キャンパスインタビューは99年にはワースト1と判定されたが、時期をうまく選びその目的を工夫すれば（たとえば大学生の消費生活調査など）成功に導けるだろう。また、体験学習と銘打たずとも、電話実習や生活情報調査、街でよく見る漢字調査などの比較的簡単に取り組みやすいタスクを授業に組み込むことも大切である。

新しい企画を考えて各段階を進めるにあたっての教師の役割を次の表の右側にあげてみた。体験学習の本番に際して、教師はどのような役割を果たすべきだろうか。単なる観察者になるべきか、参加者になるべきか。本番は学習者中心の活動になるはずのものであるが、教師もインターアクションを持つ一人として参加することは意味のあることだと思う。下の(1)～(7)までのそれぞれの段階で異なった役割を担うことになるだろう。

	各段階 ⁶⁾	学生の役割	教師の役割
(1)	ブレインストーミング→企画決定	/	項目チェックによる採択
(2)	場面&タスクの設定		現地下見, 相手方と交渉
(3)	実際的な準備		タスクシート作成など
(4)	体験学習事前活動	目的を知る 必要な準備をする	オリエンテーション 各種インプット
(5)	体験学習本番	タスク遂行による 目標達成	モニタリング 必要に応じてフィードバック
(6)	体験学習事後活動	報告, まとめ (4)～(6)をふりかえる	フィードバック 学生の意識化を促す
(7)	活動終了後	/	(4)～(6)をふりかえる
(8)	事後処理		(1)～(7)をふりかえり評価

6. おわりに

体験学習による実際の日本語使用場面を対象に考えていると、従来の教室での日本語授業への反省の思いにかられる。果して、教室で習う日本語は役に立つのだろうか。体験学習に対する学生のコメントの中には次のようなものがある。

- ・ I realized that it was harder to speak to native speakers because they speak too fast and don't speak in a complete sentence as we do and study in class.
- ・ It was very difficult talking with them. They used words that I don't know and sometimes I had no idea what they were saying.

一般に使われている日本語はスピードが速すぎる。また人々は完全な文を使って話してはいない。自分たちが耳にしたこともない言葉が多すぎる。方言も含まれているかもしれない。そのように学習者が感じるのも当然であろうが、それが更なる学習への強い動機付けとなれば、その効果ははかりしれない。

教室で使われる言語機能はごく限られたものに過ぎない。その言語が使われる環境にさらされる時間が長くなれば次第に自然習得するものが多くなるだろう。しかし、短期留学生のように時間に限りがある場合には、その言語環境を最大限に利用するために体験学習の試みが有効である。体験学習は教室内活動と実際のコミュニケーションの場面とを橋渡しをする活動である。体験学習を通して学習者は会話のストラテジーを学ぶことができるだろう。たとえば、聞き取れなかった時にはどうするか、聞いた内容を再確認したい時にはどうするか、誤解が生じた時にはどうするか、どうしても通じなかった時にはどうするか。これらの方略を身につけることは教室内活動だけでは限度がある。これらを学ぶことができれば、自信につながるであろう。ある学習者は次のような感想を述べている。

・ Today's activity was fun and was an effective method of learning. It requires application of the information that we are leaning in class. I'm glad it's a part of our weekly schedule. この学習者は体験学習と教室内活動に接点を見出し、両者の果たす役割を認識している。短期日本語集中講座のシラバスを考える際にはこれらの視点を考慮に入れていきたい。

インターアクションに重点を置いた日本語体験学習によって学習者は何を習得するのだろうか。これはさまざまな視点から考察されるべきであるが、「観光のための日本語プログラム」でもなく、「異文化体験プログラム」でもないのだから、言語運用能力の向上という面からの測定がなされるべきであろう。甲南大学夏期日本語集中講座では学習者の成績評価を協定大学宛に送付している。この成績評価の基準ではペーパーテストの得点と同じく会話能力の評価に重点を置いている。ペーパーテストからは客観的な数字が出されるが、会話能力の客観的測定は容易ではない。体験学習によって会話能力がいかに伸びたかを測定するための方法はまだ確立していない。体験学習に参加するだけでなく、タスクシートの完成や礼状の作成などの課題をクリアした者には努力が報われるようにしている。言いかえると、学習者の実力が成績に反映されていないということになる。全体的な会話力の測定はなされているが、体験学習による会話能力の向上の測定は難しい。体験学習というものを広義でとらえると、ホームステイ先での言語生活がいちばん大きな割合を占めるものとしてクローズアップされてくる。体験学習で習得したのか、ホームステイで習得したのか、教室活動で学習したのかの区別はつきにくい。体験学習の成果を早急にはかろうとすること自体に問題があるのかもしれない。道聞きのための表現、人を招待する時の表現などを知っていることに何の意味があるだろうか。体験学習の存在意義は知識の量を増やすことにあるのではない。言葉の一つや二つを多く知っていることよりも、日本語を使ってコミュニケーションができた！という達成感を得て自信をつけることの方に意味があるだろう。従って、体験学習による会話力の伸びを測定するよりも、総合的な会話能力の伸びに関心を持つ方がよいのではないかとも思われる。会話の能力測定はコース終了時の到達度テストとしてはかるよりも、総合的な実力判定テストとして測定するのが妥当ではないだろうか。この点に関してはまだまだ今後の大きな課題である。

付記：体験学習プログラムは本校の日本語担当教員を初めとするすべての協力者の尽力によって実施されてきたものである。そのおかげで実践報告ができることに心から感謝申し上げます。

注

- 1) 6週間という極めて短期間しか日本に滞在しない学習者にとって、日本語体験学習は欠かせないものであると見なされるので、夏期日本語集中講座の参加者に対して実施されている。甲南大学における9ヶ月の交換留学プログラムの日本語講座では体験学習はまだ積極的には取り入れられていない。
- 2) 三角友子(2000)『異文化コミュニケーション教育のキーワード(月刊日本語)』によると、「一般的に体験学習と呼ばれる学習活動の形態には、生活体験、見学などの教室外での直接体験を指すものと、プロジェクトワークやディスカッションなど、教室活動と関連して行うものがある」という。本稿における「日本語体験学習」は言語活動を核にしたものを想定しているのので、後者を指しているということが出来る。生活体験や見学との共通点を含んでいるが、言語を使ってみるという体験が含まれることを最も重視したものである。以下、本稿で用いる「体験学習」は「日本語体験学習」を指す。
- 3) 高校での日本語学習歴を持っている学習者が多いが、大学での1年間の学習を終えた者を対象とする。
- 4) 85名のうち大半はハワイ大学からの学生である。他大学の学生は約1割である。
- 5) 放送ブースの中での録音は放送クラブの部員の好意によるものである。留学生だけでなく教師も事前に把握していなかったため、即興で行なわれた対話である。
- 6) この表は平成11年度日本語教育学会春季大会ポスター発表において用いられたものである。
(森川結花, 富阪容子「日本語体験学習の実際とその成否を決める要因の分析」)

参考文献

- 猪崎保子ほか(1988)「コミュニケーション重視の学習活動—プロジェクトワーク」凡人社
- 尾崎明人・J. V. ネウストプニー(1986)「インターアクションのための日本語教育—イマーシオンプログラムの試み」日本語教育59号
- 田中 望(1993)「日本語教育の理論と実際」大修館書店
- バルダン田中幸子(1987)「初級におけるシミュレーションとプロジェクトワーク—実践と考察」日本語教育論集第3号 筑波大学留学生教育センター
- 堀口 純子(1997)「日本語教育と会話分析」くろしお出版
- 溝口 博幸(1995)「インターアクション体験を通じた日本語・日本事情教育—日本人家庭訪問の場合—」日本語教育87号
- 三国純子・小山真理(2000)「海外の大学生を対象とした短期集中日本文化学習の試み」日本語教育105号
- 山下早代子ほか(1994)「インタビュープロジェクト」くろしお出版
- D. L. Fried-Booth "Project Work" (1986) Oxford University Press